

小学校低学年のLD等支援の必要な子どもの指導法

- 個別の指導計画を活かした教科学習の進め方 -

久保田 昌子

日々の授業の中で、子どものもてる力を最大限に伸ばすための指導や支援を計画することは、学力を保障する上で欠かせないことである。とりわけ小学校の入門期は、学力面では基礎となる力をはぐくみ、生活面では仲間集団を形成するための基本的なルールを身につける大切な時期である。そこで、通常の学級におけるLD等支援の必要な子どもの確かな学びのために、個別の指導計画を有効に活用した授業の在り方を追究したいと考えた。そして、低学年の国語科の進め方に焦点を当て、つまずきを予想して具体的な支援や手だてを入れた授業展開例を提示した。さらに、学びを支える学級集団の在り方を探り、一人一人のよりよい成長につながる個別の指導計画となる具体的な方法を提示した。

第1章 小学校低学年からの支援の必要性

第1節 LD等支援の必要な子どもの現状

今、学校現場では、学級がうまく機能しない状況が低学年にもあることが報告されている。見通しのもてないことへの不安や、集中することの困りのある子どもは、学級として落ち着かない状況の下で、さらに困りが増えてしまうことが予想される。また、低学年であるがゆえに、支援の必要性を見逃されてしまうことも考えられる。

支援の必要な子どもが安心して過ごすことができる学級は、どの子どもにとっても必要なことである。総合育成支援教育（特別支援教育）の制度が整い、個別の指導計画の重要性が明確にされてきた今こそ、それを活用し、早期に子どもに合った適切な指導・支援をすることが必要である。

第2節 低学年から取り組む指導・支援の意義

E.H エリクソンやR.J ハビィガーストの発達理論では、小学校段階で学習することや友だちと過ごすことの成功体験の積み重ねが、それ以降のよりよい成長に寄与すると述べられている。

学習や友だちとの集団生活が中心となる小学校段階において、LD等の発達障害の困りが、より明確になってくる。困難の実態を整理すると次の二つの共通した項目を挙げることができる。

- 見通しのもてないことに対する不安感
- 言葉やコミュニケーションに関する困り

指導者は、このような特徴を理解した上で、子どもの実態を的確に把握することが必要である。低学年より学習面や友だちとのかわりについて、適切な指導や支援をすることで、学びが保障され、成功体験を積み重ねることにつながると思われる。

第2章 個別の指導計画を活かした授業づくり

第1節 学びを支える学級づくりの視点

支援の必要な子どもが、通常の学級において安心して自分らしさを発揮するためには、相互理解を深めること・環境を整えること・連携を大切にすることが大切であると考えられる。

この三つの視点を踏まえて、授業を充実させるために、個別の指導計画を活用する意義を次のようにまとめた。

個別の指導計画を活用する意義

- 子どもの長所、得意なこと、困りを把握することができる。
- 具体的な指導や支援の方法を探る基準となる。
- 目標設定による、指導・支援の方向性が明確になる。
- 定期的な記録を活かし、段階を踏まえた精選された効果的な支援ができる。
- 連携を進める具体的な資料となる。
- 具体的な支援の方法や、成長の結果と課題とを明記した次年度への引継ぎ資料となる。

第2節 わかる授業の二つの側面

子どもが「わかる」と感じるときは、自分の力で「できた」と実感したときや、学習した内容が「理解できた」と実感したときだと考える。この達成感、楽しさや自信につながる。

支援の必要な子どもに届く授業をつくるための大切な視点として、次の二点を挙げる。

- 見通しのある学習
- 言葉やコミュニケーションを重視する学習

個別の指導計画を活用し、図1のような流れで二つの視点を取り入れた授業展開を考えたい。

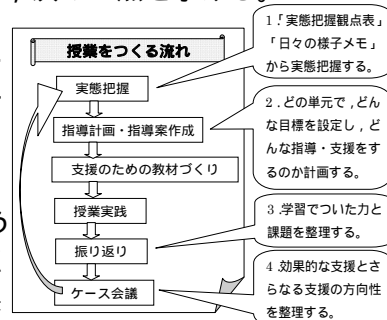


図1 授業をつくる流れ

第3章 個別の指導計画を活かした授業の実際

第1節 言葉に重点をおいた入門期の実践例

- 小1A児を通して -

学年ケース会議において、A児の実態と支援が必要と予想される場面について話し合い、支援の計画を立てた。A児は、書いたり読んだりすることに困りがあり、発する語彙が少ないため、友だちとのコミュニケーションにも課題が見られた。

そこで、言葉を大切にする活動に重点をおき、見通しをもって楽しく学べる工夫、語彙を大切に作る工夫、コミュニケーションを大切に作る工夫の三点を取り入れ、国語科の『のばす音』と『じどうしゃくらべ』の単元で実践を行った。

の支援として、導入で挿絵や実物を、興味をもって見られるように提示の仕方を工夫した。の支援として、挿絵と言葉の一致を図り、リズムよく音読したり、話型を活用したりすることを、授業形態の工夫を図り、繰り返し行うことができるようにした。の支援として、友だちと声をそろえて音読したり、互いに説明し合ったりするなど、友だちとかかわる

活動を取り入れるようにした。その際、指導者は、A児とのかかわりを大切にし、十分に練習し、自信をもって友だちと活動できるように配慮を行った。



図2 平仮名カードを並べる様子

第2節 書くことに重点をおいた系統立てた指導の実践例 - 小2B児を通して -

B児は、授業中に活発に発言し、意欲的である。しかし、興味が持続できず、「嫌だ。」「わからない。」と思うと、極端に消極的な態度を示すという課題が見られた。また、自分に自信がもてないために、相手を認めることができず、結果的に自分本位に行動してしまう様子が見られた。

そこで、B児が苦手と感じている文章を書くことについて『もうすぐ夏休み』と『お話、大すき』の二つの単元を通して指導することにした。授業では、単元の見通しがもてるようにし、目的をもって学習が進められるようにする工夫、コミュニケーションを大切に作る工夫、学習の成果を残し、自分で「できた」という達成感をもてる工夫の三点を取り入れて実践を行った。

の支援として、作文や物語の見本を提示し、学習計画を立てることにより、目的を明確にし、見通しをもって学習できるようにした。の支援

として、書くために必要な事柄を集めるために、インタビューしたり友だちと交流したりする場面を設定した。その際、尋ねる視点や交流の視点を明確にしてから活動することや、相手と話す態度や言葉遣いについて見本を見る・練習する・実践するという細かい過程も大切にした。

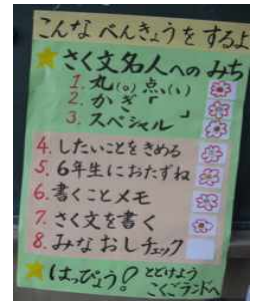


図3 提示した単元計画

の支援として、自分の力で書くという意識を明確にもてるように、カード式の「作文メモ」や挿絵を活用した。実際に文章に書く場面で、それらを活用して自分で書き進められるようにした。また、自信につながるように、作品を友だちや教職員、家の人などに読んでもらうことにより、評価される場を設定した。

個別の指導計画を活用したことにより、子どもの興味や得意なことを活かし、予想したつまづきに対する支援を考えた授業展開が可能になった。

第4章 継続的・効果的な支援のさらなる充実に向けて

第1節 研究の成果と課題

見通しのある学習を大切にしたことにより、「何を」「どのように」「いつまでに」やるのが明確になり、子どもが集中して学ぶ姿が見られた。また、コミュニケーションを重視した活動を取り入れたことにより、話し方の基本的なルールが身についた。さらに、コミュニケーションを大切にする視点をもつことで、支援の必要な子どもと集団とのかかわりを密にすることができた。

一方、見通しをもって支援をするためには、指導者にそれぞれの教科の特性や指導内容の系統性などを把握することが求められる。また、コミュニケーションの力を高めるためには、一つの取組で十分に身につくものではないことから、様々な機会をとらえて、系統的かつ具体的な指導を継続することが必要である。

第2節 個別の指導計画の充実のさらなる可能性

支援の必要な子どものよりよい成長のために、子どもを学校全体ではぐくむという視点を持ち、校内体制を充実させることが大切である。また、就学前から卒業後までの一貫した支援が行われるような制度を整えていくことも必要である。その際、個別の指導計画が継続して活用され、子どもの成長の記録となっていくことが望まれる。